

『現代の英雄』

——日付の一致をめぐる——

山路 明日太

『現代の英雄』を読むときやりきれない思いにとらわれる。主人公ペチョーリンが自身のうちに強い力を感じていながら、その力を実人生の中に生かせずに、狭い人間関係の中での欲望にその身を委ねてしまっているからである。そこに「時代の英雄」という表題の皮肉がこめられていることについては、ベリンスキー以来長年論じられてきた。だがこれから論証するように、レールモントフはそうしたペチョーリンになお「時代の英雄」たる由縁を含ませていたようであり、そのひとつとして日付の一致という問題を取り上げてみたい。日付を仔細に見ていくことから、「時代の英雄」ペチョーリンと「理想的な英雄像」ナポレオンとのアイロニカルな繋がりが明らかになる。

1. 「非凡なる」ペチョーリン

まず、ペチョーリンとは一体どのような人物なのか、特にかれの「非凡さ」とは一体どのような性質のものかという観点から、確認しておきたい。ペチョーリンはグルシニツキーとの決闘前夜に自分の人生を振り返って次のように述べている。

Зачем я жил? для какой цели я родился? ... А верно она существовала, и верно было мне назначенье высокое, потому что я чувствую в душе моей силы необъятные; но я не угадал этого назначения, я увлекся приманками страстей пустых и неблагодарных; из горнила их я вышел тверд и холоден, как железо, но утратил навеки пыл благородных стремлений, лучший цвет жизни. И с той поры сколько раз уже я играл роль топора в руках судьбы! [...] (321)¹

何のためにおれは生きてきたのだ？ いかなる目的のためにおれは生まれたのか？ だが、確かに目的は存在したのだ、確かにおれには高い使命があったのだ、なぜならおれは自己の魂のうちに無限の力を感じているのだから。だが、おれにはこの使命の察しがつかず、空疎で甲斐なき情欲の誘惑に惹きつけられてしまった、そして情欲の溶鉱炉から出てきたときには、鉄のように堅く冷たくなってい

¹ 『現代の英雄』からの引用は、*Лермонтов М.Ю. Соч.: В 6 томах. М.-Л., 1957. Т. 6* により、() 内に頁数を記す。

て、しかも人生の何よりの花である高尚な意欲の炎を永久に失ってしまったのだ。以来、おれは運命の手に握られた斧の役割を何度演じてきたことか！
(傍点山路)

最初にこの嘆きの文章を取り上げるのは、ここにペチョーリンの「時代の英雄」たる由縁が簡潔に述べられているからである。小説全体を読んで読者の感じるやりきれない思いというのは、ペチョーリンには自分自身感じている「無限の力」がありながら、空疎で甲斐なき「情欲の誘惑」に惹きつけられたがために「高尚な意欲の炎」を永久に失ってしまい、「斧の役割」を演じる羽目に陥っているという点にある。このように抽象的な単語や比喻を使って述べられているかれの人生観であるが、個々の事例に沿って少し見てみよう。

まず「空疎で甲斐なき情欲の誘惑」について、ペチョーリンは別の箇所で次のような文章を書いている――

Я чувствую в себе эту ненасытную жадность, поглощающую все, что встречается на пути [...] А первое мое удовольствие – подчинять моей воле все, что меня окружает. (294)

おれは途中で目に触れるもの全てを飲み尽くしたい飽くことを知らぬ貪欲さを身内に感じる。[...]おれの第一の喜びも――周囲の一切をおれの意志に服従させることなのである。

この「周囲の一切を自分の意志に服従させる」欲望こそ、ペチョーリンが「情欲の誘惑」に惹きつけられてしまった結果であろう。ペチョーリンはこの欲望に身を任せたがために、グルシニツキー、メリー、ヴェーラなど、全ての他者を自分の意志に従わせようとしているのである。

ペチョーリンの「無限の力」については、とりわけかれ自身がその力を証明してみせようとするだけになおさら、手記の中で際立って感じられる。特にここではかれのその証明の仕方について見てみたい。それは或ることについて前もって予告しておいて、後にその予告を現実に証明してみせるという形をもつ。

ペチョーリンはしばしば周囲の人々の表情からその心理を精確に読み取る。例えばメリーが実際にはグルシニツキーのセンチメンタルな話をなおざりに聞いていながら、ペチョーリンの前ではグルシニツキーの話に特別に注意を払っているように見せかける、という複雑なその理由について、ペチョーリンは次のように見破っている。

Но я вас отгадал, милая княжна, берегитесь! Вы хотите мне отплатить той же монетою, кольнуть мое самолюбие, - вам не удастся! [...] (291)

ところでこっちじゃ、あなたの腹はちゃんと読めるんですからね、ご注意くださいよ！あなたはされた通りの仕返しをする、つまり小生の自尊心を突き刺そうというおつもりでしょうが、そううまくはいきませんよ。

またペチョーリンは自らの過去について長々とメリーに語った後、彼女の心の変化を次のように捉えている。

... ей было жаль меня! Сострадание, чувство, которому покоряются так легко все женщины, впустило свои когти в ее неопытное сердце. (297)

…彼女はこのおれがかわいそうになったのだ！同情という、全ての女性が実にたやすく服従する感情が、いまや彼女のうぶな心にその爪を突き刺したのである。

これらの引用からわかるように、ペチョーリンは他者の外面からその心理を見破っており、見破った事についてはその都度手記の中で強調される。

ペチョーリンが予想し、その予想が正しかったことを証明するのは、表情から他人の心理を読み取る時に限るものではない。かれは各々の登場人物たちと後々どういった関係になるかということについて、すでにかれらと出会ったその時々で予言するのだが、それらの予言は常的中している。例えば友人グルシニツキーと敵対関係になることについてはすでにその手記の初日に予言する――

Я чувствую, что мы когда-нибудь с ним столкнемся на узкой дороге, и одному из нас не сдобровать. (263)

おれにはいつか二人は狭い路上で衝突し、どちらかが災いを免れきれぬ羽目になるような気がしている。

その後この予言どおりかれらは決闘で闘うことになり、グルシニツキーは死んでしまう。

ヴェーラとの永遠の別離については、彼女との再会を果たしたその日に早くも予告している。

Я знаю, мы скоро разлучимся опять и, может быть, навеки: оба пойдем разными путями до гроба; но воспоминание об ней останется неприкосновенным в душе моей[...] (280)

おれにはわかっているが二人はもうじきまた別れるだろう、しかも恐らくは永久に。二人は墓場まで別々の道を進むのだ、しかしこの女の思い出はおれの心の中にそとに残るだろう。

ペチョーリンのこの予言も的中し、物語の結末でヴェーラは永久に立ち去ることになる。

こうした予言は悲劇的なものに限らない。ペチョーリンはメリーが冷淡な態度であしらのを目にして次のように述べる――

Торжествуйте, друзья мои, торопитесь... вам недолго торжествовать!... Как быть? у меня есть предчувствие... Знакомясь с женщиной, я всегда безошибочно отгадывал, будет ли она меня любить или нет... (292)

勝ち誇りたまえ、ご兩人（メリー、グルシニツキー）、せいぜい今のうちだから…君らの勝利は長続きしないんだぞ！…仕方がないじゃないか、おれには予感があるのだから…女と近づきになると同時に、その女がおれを愛するようになるかならぬか、いつでも間違いなく言い当ててきたおれなのだ！

この予告もまた実現し、その後メリーはペチョーリンに対して恋を打ち明けることになる。

以上みてきたことから、ペチョーリンにはある種の予言性、予告性とでもいうべき性質があることがわかる。そしてかれにおいて顕著なのは、自分の予告の正しさを自分で証明しつづけている点であり、そのことがかれの「非凡さ」を証明するものだと信じているかのようである。かれの行動を見る限り、この非凡さこそ、自分の内なる力を証明するものだといえるだろう。

しかし、読者は同時にかれのその力があまりに小さなことに費消されてしまっていると気づかないではいられない。それはかれ自身が嘆くことによって特に強調されている。例えば、前述の「何のためにおれは生きてきたのか」という問いかけで始まる引用を始めとして、ペチョーリンの過去を振り返る幾つかの独白からも、かれが自分の内に使命を感じていたにもかかわらずその使命とは裏腹に、グルシニツキーとの争いやいたいけな少女メリーの愛を射止めることにその力を費やしてしまっている、という後悔の念は感じられるだろう。だがここで取り上げたいのはそうした直接的な感情を表す独白だけではない。作者レー尔蒙トフはより巧妙な仕掛けを用いることによって、ペチョーリンの「非凡な才能」がもっぱら卑小なことに費やされているという現実を浮かび上がらせようとしている。そしてその仕掛けについて考える上で重要なのは、「時代の英雄」と対比される歴史上実在した英雄たちへの言及である。

2. 過去の英雄への言及

ペチョーリンは、将校に昇進したグルシニツキーにメリーを誘う権利ができたということを知ると、グルシニツキーを出し抜きかれには内緒でメリーにマズルカを申し込む。かれはその会場に向かうとき、「この地上でのおれの唯一の使命は他人の希望を踏みにじることなのだろうか（Неужели мое единственное назначение на земле – разрушать чужие надежды?）」と自問して、次のように嘆く――

Уж не назначен ли я ею (судьбой) в сочинители мещанских трагедий и семейных романов [...] Мало ли людей, начиная жизнь, думают кончить ее как Александр Великий или лорд Байрон, а мажду тем целый век остаются титулярными советниками? (301)

おれは運命によって風俗悲劇や家庭小説の作者たるべく定められているのか[...]人生の門出にあたってアレクサンダー大王やバイロン卿たらんと志しながら、生涯を九等官で終わった人間も決して少なくはないのだから。

ペチョーリンはここでアレクサンダー大王やバイロン卿といった過去の英雄たちと比較しながら自らの不幸な役回りを嘆いている。かれは若いころ英雄になることを志しながら、結局のところ「首斬り役人とか裏切り者という惨めな役どころ (жалкая роль палача или предателя)」を務める羽目になってしまったと嘆いている。

また英雄への言及という意味では、断崖の決闘場に登っていく途中、グルシニツキーが躓いて滑り落ちそうになるときに、すかさずかれを冷やかして発する次のような言葉もある――

Берегитесь! [...] не падайте заранее; это дурная примета. Вспомните Юлия Цезаря! (327)

気をつけたまえ！ [...]撃ち合いの前に転ぶなよ。それは悪い前兆だぞ。ジュリアス・シーザーを思い出してみろよ！

シーザーはあるときポンペイ参次会の敷居で躓いたが、その後すぐ謀反人たちによって殺されたという。かれが殺された現場となる元老院会議へ向かうとき躓いたことは、死の前兆として伝説的なものとなっている。ペチョーリンのこの言葉はその故事を踏まえたものである。² なるほどここでのペチョーリンは自分自身ではなく敵役のグルシニツキーについて、シーザーを当てはめている。だがかれが自らとグルシニツキーとの決闘の場に伝説的な「前兆」を持ち出すこの台詞の裏には、やはり自分自身を歴史的英雄の立ち現れる場に関連づけようとする意識が垣間見えるといつてよかろう。

こうしてみるとペチョーリンには、自分自身と過去の英雄たちとを比較することにより、自己の使命や現実生活における自分という存在について理解しようとする側面があるように思われる。ところがこれから論じるように、ペチョーリンと過去の英雄たちとの関係付けは、当時の人々の記憶にも新しい英雄としてのナポレオンに対してもみられる。そしてそこでは単なる固有名詞の言及だけではなく、日付の一致という巧妙な関係付けが加えられることによって、ペチョーリンと過去の英雄たちとの皮肉な対照関係がなお一層くつきりと浮び上がってくることになる。

² Мануйлов В.А., Миллер О.В. Комментарии // Лермонтов М.Ю. Герой нашего времени, СПб., 1996. С. 351.

3. 日付の一致の論証

『現代の英雄』の「公爵令嬢メリー」には、他の「ペチョーリンの手記」とは異なる明らかな外形的特徴がある。すなわち「タマーニ」や「運命論者」と違って、「公爵令嬢メリー」は日記の形態を取っており、そこでは物語の冒頭から日付が付されているという点である。その日付はペチョーリンがカフカスのピャチゴルスクに到着した翌日の5月11日を初めとし、グルシニツキーとの決闘の前々日の6月16日を最後としており、それ以降日付自体の記述はない。本論考で特に問題にしたいのは、この6月16日以降の日時の検証である。というのもこの日時を確定させることが、後に述べるように、ある歴史的事件の日付との一致を確かめることにつながり、レールモントフの「時代の英雄」に対する皮肉な見方を明らかにすることになるからである。

ただ、日時の検討に入る前に指摘しておくべき点がある。6月16日以降、些か時間進行が複雑にされており、実際にペチョーリンがグルシニツキーと決闘を行ったのは何月何日なのか読者に計算することを忘れさせるような仕組みになっているという点である。「公爵令嬢メリー」は日記体ではあるが、もちろん毎日書かれていたわけではない。書かれなかった日も度々ありはしたが、注目すべきなのは、ある時点まで常に日付の付された形で書き付けられていたということである。ところが6月16日付の決闘前夜の動揺を表した手記を境に日付は途絶えてしまう。ペチョーリンは決闘前日（6月16日付の17日深夜2時）を最後に手記の記述を中断しており、実際に決闘から結末に至る一連の事件について書き付けているのは、決闘について当局に感づかれ、マクシム・マクシムィチの勤務するN要塞に配属替えになってしまった、さらに一ヶ月半も後のことである。たしかに「手記」の筆者ペチョーリンにしてみれば、決闘やヴェーラ、メリーとの別れといった事件があった後すぐに心痛を抱えながら一連の悲劇的事件をまとめることは不可能だったこと、また配属替えによる環境の変化から筆を執る余裕はなかったことなど、幾つかの事情は察せられるのであり、この点でも作者レールモントフ一流の動機付けの妙は怠られなかったといえる。だが結局のところ、ペチョーリン自身一ヶ月半ものインターバルを置いて書くことになり、手記最後の日付と比べて日時及び頁数が大きく隔たることになるという現実が残ったわけである。恐らくそうした隔たりは読者が読む際にも作用し、決闘の日時から、読者の注意を逸らせてしまうことにもなろう。だがここではあえて6月16日以降の日時の経過に迫り、日付を確定させてみよう。

6月16日にペチョーリンはレストランでヴェーラの夫と一緒に朝食を食べている最中に、グルシニツキーがかれとメリーのことを侮辱しているのを耳にして、決闘を申し込むことになる(318)。ペチョーリンはその足でヴェルネルに介添人を頼みに向かい、ヴェルネルはそれを承諾する(319)。一時間後交渉から戻ってきたヴェルネルは決闘の取り決めについて次のとおり伝える――

«[...]верстах в пяти отсюда есть глухое ущелье; они туда поедут завтра в 4 часа утра, а мы выедем полчаса после них; стреляться будете на 6 шагах[...]» (320)

「[...]ここから五露里ほど行ったところに寂しい谷があります。連中は明朝四時にそこへ出発し、わたしたちはその三十分後にでかけることにしました。六歩の距離を置いて撃ち合います。[...]」

この文章から決闘は6月17日早朝4時半過ぎに行われる予定だということがわかる。ペチョーリンはその夜なかなか寝付けず、決闘のために動揺する自身の思いを書きつける (321)。前述のように、その後、手記を実際に書きつけるペチョーリンの日時と場所は書かれている事件のそれらから大きく離反してしまうことになる(「N. N要塞に来て、もう一ヶ月半にもなる… (Вот уже полтора месяца, как я в крепости)」(322)以降)が、かれが興奮で眠れない決闘前夜を小説を読んで過ごしていると「とうとう夜が明けた (Наконец рассвело.)」と記述されていること (322)、その後日時の変更についての記述も何ら見られないことなどから、当初の予定どおり6月17日早朝に決闘が行われたことに間違いない。

決闘後、ペチョーリンはグルシニツキーを殺してしまったことにより心を痛め、重苦しい思いを抱えながら、道に迷い疲れきってキスロヴォツクに帰り着くのがその日の「もう太陽も沈みかけるころ (уж солнце садилось)」(331)であり、留守中に届けられていたヴェーラの決別を告げる手紙を読んで彼女を追いかけるのが「西の峰々に憩う黒雲の中に太陽がすでに没した (солнце уже спряталось в черной туче, отдыхавшей на гребне западных гор.)」ときである (333)。疲れ果てている馬を容赦なく駆り立てて、「別の馬に乗り換えることのできるエセントウキというコサツク村まで5露里 (Оставалось 5 верст до Есентуков, казачей станицы, где я мог пересесть на другую лошадь.)」のところまでやってくるのだが、「山から出ようとして、小さな谷を登っていく途中、急な曲がり角でふいに馬は地面にどうと倒れてしまう (Вдруг, поднимаясь из небольшого оврага, при выезде из гор, на крутом повороте, он грянулся о землю.)」(334)。そこでペチョーリンは草の上に倒れ伏し赤子のように泣いた後、15露里の道のりを歩きとおして「キスロヴォツクに帰り着いたのが朝の5時であった (возвратился в Кисловодск в 5 часов утра.)」とあるが (335)、それは以上みてきたことから、歩いている間に日付も変わった6月18日の早朝に相違ない。そしてまさにこの日、ペチョーリンは帰宅後の自らの深い眠りを次のような比喻を用いて表現したのである――

Я [...] бросился на постель и заснул сном Наполеона после Ватерлоо. (335)

おれはベッドにぶっ倒れて、ワーテルローの戦いの後のナポレオンのように眠った。

ここで興味深い日付上の一致に気づく。すなわち、ペチョーリンが「ワーテルローの戦いの後のナポレオンのように眠った」日付と、ナポレオンが実際にワーテルローの戦いを行った日付は一致するのである。

ナポレオンとは周知のとおり歴史に残る稀代の英雄であった。かれはフランス革命の社会的激動期後の安定傾向に乗じて第一帝政を打ち立てた軍事・政治上の天才である。そしてワーテルローの戦いとは、そのかれが最後の敗北を被った戦いである。エルバ島を脱出して自由主義帝国構想を示して再び支持を集めたナポレオン（いわゆる百日天下）の軍を、ウェリントン率いるイギリス軍とブリュッヘル率いるプロイセン軍とが撃破した戦闘である。この戦いの敗北によりナポレオンは没落を決定づけられ、セントヘレナ島に流され、その孤島で人生を終えることになる。そのワーテルローの戦いが行われたのが、1815年6月18日であった。

ただしここでいくつか考えておくべきことがある。第一に暦の問題である。旧ロシア暦はユリウス暦を採用していたために、グレゴリオ暦を使っていた西洋暦よりも19世紀において12日の遅れがあり、³「ペチョーリンの手記」における6月18日を西洋暦に直してしまうと6月30日になってしまうのではないかという反論もありうるかもしれない。だがワーテルローにおけるナポレオンの敗戦は、ヨーロッパからの報道によって知ったロシア人にとっても6月18日と記憶されていたと考えるのが自然ではなかろうか。そしてやはりこれら二つの日付が数字上完全に一致することは重要であり、まさにこの日付の一致から作品全体に皮肉な意味が添えられる。

第二点は注釈者マヌイロフによる次のような断り書きに関係する。「ワーテルローの戦いの後のナポレオンのように眠った」という文章を取り上げて、この注釈者は次のような短い注を付している――

（おそらく信頼できないような）言い伝えによれば、ナポレオン一世はかれの帝国が崩壊したワーテルローの戦い（1815年6月18日）の後、その落胆ぶりはあまりに大きく、一昼夜半以上も眠りとおした。⁴

ここでマヌイロフはこの言い伝えについては「（おそらく信頼できない）」ものだと括弧付きで断り書きを入れており、信頼できないような言い伝えを取り上げることに意味はあるのかという点が指摘されるかもしれない。しかし、レールモンツフ自身がこの言い伝えに敏感に反応し、「ペチョーリンの手記」の中で唯一日付の付された「公爵令嬢メリー」に利用したのは事実である。

したがってワーテルローの戦いにおけるナポレオンの敗戦が6月18日であり、ペチョーリンが「ワーテルローの戦いの後のナポレオンのように眠った」のも6月18日だという点は単なる偶然とは考えにくい。だが第三に、日付の一致などたとえ偶然ではないにしても、作家の「遊び」に過ぎないのではないかという問題がある。確かにこのような些細な事実は、作家の気まぐれや遊びから出たのかもしれないが、こうした「遊び」にこそ作家による無

³ R.ヒングリー著、川端香男里訳『19世紀ロシアの作家と社会』平凡社、1971年、25頁。

⁴ Мануйлов, Миллер. Комментарий. С. 356.

意識の志向性がみられるものと思われる。事実この日付の一致はやはり吟味に値する「遊び」ともいえ、それは『現代の英雄』という表題の皮肉にも直接関わるものなのである。

4. レールモントフのナポレオン観

レールモントフのナポレオンに対する熱狂ぶりはバイロンに対するものと同様、熱烈なものであった。かれはこの歴史的人物に対して生涯関心を持ち続け、その運命的遍歴をめぐって、幾つもの詩を書いている。

レールモントフには「ナポレオン詩群 (Наполеоновский цикл)」と後に呼ばれることになる一連の抒情詩群がある。この抒情詩群はさらにそのテーマの点で二つに分けられ、ナポレオンとその歴史的運命をテーマとした詩群〔「ナポレオン」(Наполеон, 1829)、「ナポレオン」(Наполеон, 1830)、「ナポレオンの墓碑銘」(Эпитафия Наполеона, 1830)、「セントヘレナ」(Св.Елена, 1831)、「空飛ぶ船」(Воздушный корабль, 1840)、「最後の新居」(Последнее новоселье, 1841)〕と、1812年祖国戦争でのロシア国民のナポレオン軍に対する勝利をテーマとした詩群〔「ボロジノの荒野」(Поле Бородина, 1831)、「二人の巨人」(Два Великана, 1832)、「ボロジノ」(Бородино, 1837)〕とに分類される。⁵ そのうち今ここで簡単に触れておきたいのは第一の抒情詩群である。

レールモントフはこれらの抒情詩の中でこの英雄を裏切ったフランス国民について、かれらが軽薄にもナポレオンに対する賛否の態度を二転三転させたことを非難する一方、「神の指によって (божественным перстом)」運命的に名指された人ナポレオンの卓越した個性に対して憧憬に近い感情を表明している(「最後の新居」)。

また或る詩の中では詩人がナポレオンの墓前で、生前いくら栄光を追い求めようとも死後はその墓を、一介の漁師にさえも「ぼろぼろの網を引きずられ、無言で踏みにじられて (безмолвно попирает, / Таща изорванную сеть,)」しまうものだ、と皮肉をこめて歌っていると、一陣の風が吹いて、月が黒雲に隠れ詩人の歌は遮られる。そしてナポレオンの幻影とおぼしき「影」が現れ、次のような主張をする――

Умолкни, о певец! - спеши отсюда прочь, -

[...]

Я выше и похвал, и славы, и людей!...

(«Наполеон»)

黙れ、詩人よ、いますぐここから立ち去るがよい、

[...]

我が輩は賞賛よりも名誉よりも人民よりも高いところにいるのだ!

(「ナポレオン」1829年)

⁵ Лермонтовская энциклопедия, М., 1981. С. 332.

この詩で語られているのは、人民と英雄的個性との対立であろうが、「影」として語られるナポレオンの主張をレールモントフは大きく肯定しているといえるだろう。特に引用された最終行からは、「賞賛や名誉」などという一般的な人間の評価では捉えることのできないナポレオンの特別な個性を作者が認めていることは明らかだろう。後世の評価の如何に関係なく、孤高の人ナポレオンの気高さを認めようとするレールモントフの心的態度が感じられる。今ここで個々の「ナポレオン詩群」について詳しく論じることは避けるが、「詩群」全体をとおしてナポレオンという個性を認めようとするレールモントフの姿勢は変わらないといえよう。

ところでこうしたレールモントフによるナポレオンの個性に対する言及は、実は上記の「ナポレオン詩群」に限るものではない。例えばかれの最大の叙事詩『サーシカ』では、プロットの主軸の展開という点からみればさほど必要がないにもかかわらず、ごく些末な話が展開されていくなかで、わざわざナポレオンに言及されている。そこでは主人公サーシカのフランス人家庭教師の話から突然、語り手は流血のフランス革命について話を展開させる。さらにそこから「誰も自分の声を上げることのできなかつた、誰も破滅的で虚偽の思考の暗闇から堅固な精神をもって飛び出すことのできなかつた」革命後の鬱屈した時代状況にあって、ひとり「ナポレオンの眼差しだけが密かに早くも将来の玉座を見つめていた」ことが言及され、その人物描写のために二つの連が割かれている（第80、81連）。こうした描写やプロット展開をみると、ナポレオンという人物像がレールモントフの好みの英雄像であったことがわかるだろう。さらにナポレオンについては、この叙事詩では最終連で、物語を終えるに際して再度言及される――

[...]

Я кончил...Так! дописана страница.

Лампада гаснет... Есть всему граница -

Наполеонам, бурям и войнам,

Тем более терпенью и ...стихам,

[...]

(«Сашка»)

[...]

わたしは書き終えた・・・そうなのだ！ 頁は最後まで書かれたのだ。

ランプは消えようとしている・・・全てのものには限度がある――

ナポレオンたちにも、嵐にも戦争にも、

ましてや我慢や・・・そして詩にも限度があるのだ、

[...]

(『サーシカ』第149連)

この箇所では、限界のあるものが列挙されていく中で、英雄的人物の一典型としては唯一ナポレオンだけが取り上げられている。こうしてみればレールモンツフにとって典型的な英雄像としてナポレオンがあり、絶えずこの人物像への憧憬を感じていたといえるだろう。

このようにレールモンツフにとって卓越した個性をもつと考えられていたナポレオンと比べて、ペチョーリンはどうであったろうか？ 確かに物語の結末に至るまでのペチョーリンはグルシニツキーを無益な決闘で殺したことにより罪悪感に苛まれていただろうし、自らを最も理解してくれていたヴェーラに去られたことである種の絶望感を感じていたといえる。従って、疲れ果てたかれが長い眠りについたことはごく当然だが、その眠りのことを「ワートルローの戦いの後のナポレオン」のようだという比喻を用いて表現することは何か違和感を掻き立てる。その違和感とは、すでに第一章で論じたようなペチョーリンの非凡な才能がもつばら卑小な人間関係の中で費やされているという現実と、ここでの比喻の対象となる英雄ナポレオンに対して作者が抱いていた憧憬とのギャップから生じるものであろう。しかも上述のような日付の一致がある以上、作者レールモンツフはペチョーリンのこの眠りに単なる比喻以上のものを含ませたといえる。この戯れにも似た日付の一致によってペチョーリンとナポレオンの一体性が強められると同時に、その現実における落差が一層際立つという、アイロニカルな結果が生み出される。疲労困憊した後の眠りという些細な情景の中にも、ナポレオンというテキストが織り込まれ、日付という潜在的なコンテキストを媒介にして、「時代の英雄」ペチョーリンに新しい光を当てる。

5. 多層的テキストとしての『現代の英雄』

『現代の英雄』には様々なテキストが織り込まれている。それは現代にあっては間テキスト性とも呼ぶことができるかもしれないが、そうした性質自体は実は古くから認識されてきた。

その中でも最も有名なのは、ベリンスキーが「ペチョーリン」という主人公の名前から、オネガ河と対立するペチョーラ河という暗示を読みとり、そこからプーシキンの『オネーギン』との対照関係の中でペチョーリンという人物像を読み解こうとしたことであろう。

これこそ我々の時代のオネーギン、我々の時代の主人公である。かれら相互の違いは、オネガ河とペチョーラ河との距離よりもはるかに小さい。時には、真の詩人が自分の主人公に授けた名前そのものの中にも合理的な必然性は存在するのである、とはいえ、恐らく、詩人本人にもわかっていない必然性が…。⁶

⁶ *Белинский В.Г. Герой нашего времени. Сочинение М. Лермонтова // Полное собрание сочинений. М., 1954. Т. 4. С. 265.*

ここでベリンスキーは「レールモントフ本人にもわかっていない必然性」という言い方で言葉を濁しはしているが、やはりレールモントフ自身、ペチョーリンという「時代の主人公」の名前を考える際に、前世代の代表的主人公オネーギンと対比されるべき文学的形象という意味合いを込めたものと考えていいだろう。

『現代の英雄』における間テクスト性についての認識という点では、エイヘンバウムの論考もそうであろう。⁷ 論者は『現代の英雄』について論じる中で、「ベーラ」「マクシム・マクシムィチ」での「わたし」とマクシム・マクシムィチの旅する行程が、プーシキンが『エルズルム紀行』で辿る行程とちょうど逆方向、チフリスからスタヴロポリに向かうものであることに注目している。⁸ そこでは「ベーラ」冒頭の険しい山に荷車を引っ張り上げようとする場面やアラグワ川とコイシャウル溪谷を見渡す情景、「マクシム・マクシムィチ」冒頭でのоказия（幸便）についての説明の場面などに、『エルズルム紀行』への暗示が指摘されている。そして保守派論者たちの非難に対する解答としてプーシキンの出版した『エルズルム紀行』が政治的に黙殺されていたこと、「詩人の死」を流布した咎で流刑されたレールモントフがそのプーシキンの『紀行』に直接言及することは難しかったことなどを考慮すれば、レールモントフはこの『紀行』に言及するのが困難な状況にあってあえて、当時の読者にとっては明らかな暗示を、『紀行』とは逆の行程を辿るということによって極めて自然な形で織り込み、自身の反抗的精神を示していたことを論証している。

エマ・ゲルシュテインは『現代の英雄』を読むとき読者が「何か明らかにされていない、最後まで言い尽くされていない、捉えがたいもの」を感じることを指摘している。⁹ そして彼女は長編『現代の英雄』がその内部で短編小説同士の相互の平行関係や対比関係を持ち、密接に関連していることを論証してみせ、またその中で自身の他の作品群とも語彙的にも比喩の面でも密接なつながりをみせている点についても指摘している。¹⁰

以上の点を踏まえて考えれば、作者レールモントフは『現代の英雄』の中に数多くの仕掛けを仕込んだと考えていいだろう。そしてその仕掛けの一つとして、「ワートルローの戦いの後のナポレオンの眠り」を巡る日付の一致をも挙げることができる。レールモントフはオネーギンと対比されるべき存在として「我々の時代の英雄」を創り上げただけではなく、同時に、現実の英雄像とも対比されるべき存在としてペチョーリンを位置づけている。ペチョーリンとは多くの英雄たちと対照されるべき多層的な読みを可能にする存在であり、だからこそかれを捉えることは難しく、同時に面白い。レールモントフが『現代の英雄』第二版の序文でわざわざ「我々の時代の英雄」という部分を強調しつつ、次のように述べているのも、理由のないことではなかったのである――

⁷ Эйхенбаум Б.М. «Герой нашего времени» // О прозе; О поэзии: Сборник статей. Л., 1986. С. 269-338.

⁸ Там же. С. 321-326.

⁹ Герштейн Э.Г. Роман «Герой нашего времени» М.Ю. Лермонтова. М., 1997. С. 73.

¹⁰ Там же. С. 75-105.

Герой Нашего Времени, милостивые государи мои, точно, портрет, но не одного человека: это портрет, составленный из пороков всего нашего поколения, в полном их развитии.(203)

我々の時代の英雄は、親愛なる読者諸兄よ、たしかに肖像である、ただただ一人のそれではない。これはすべて現世代にはびこっている様々の欠陥から創り出された肖像画なのだ。

(大文字は原文どおり、下線は山路による)